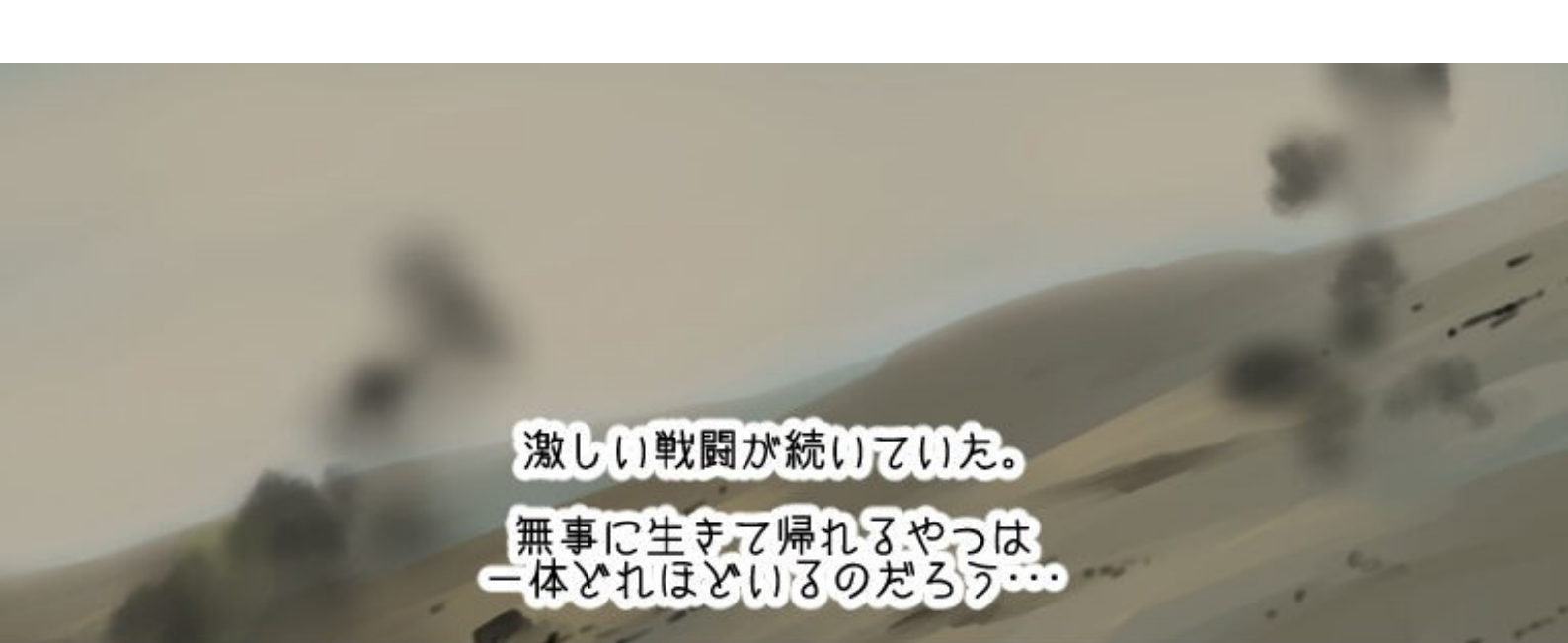




# BROTHERS IN ARMS



激しい戦闘が続いていた。

無事に生きて帰れるやつは  
一体どれほどいるのだろう…



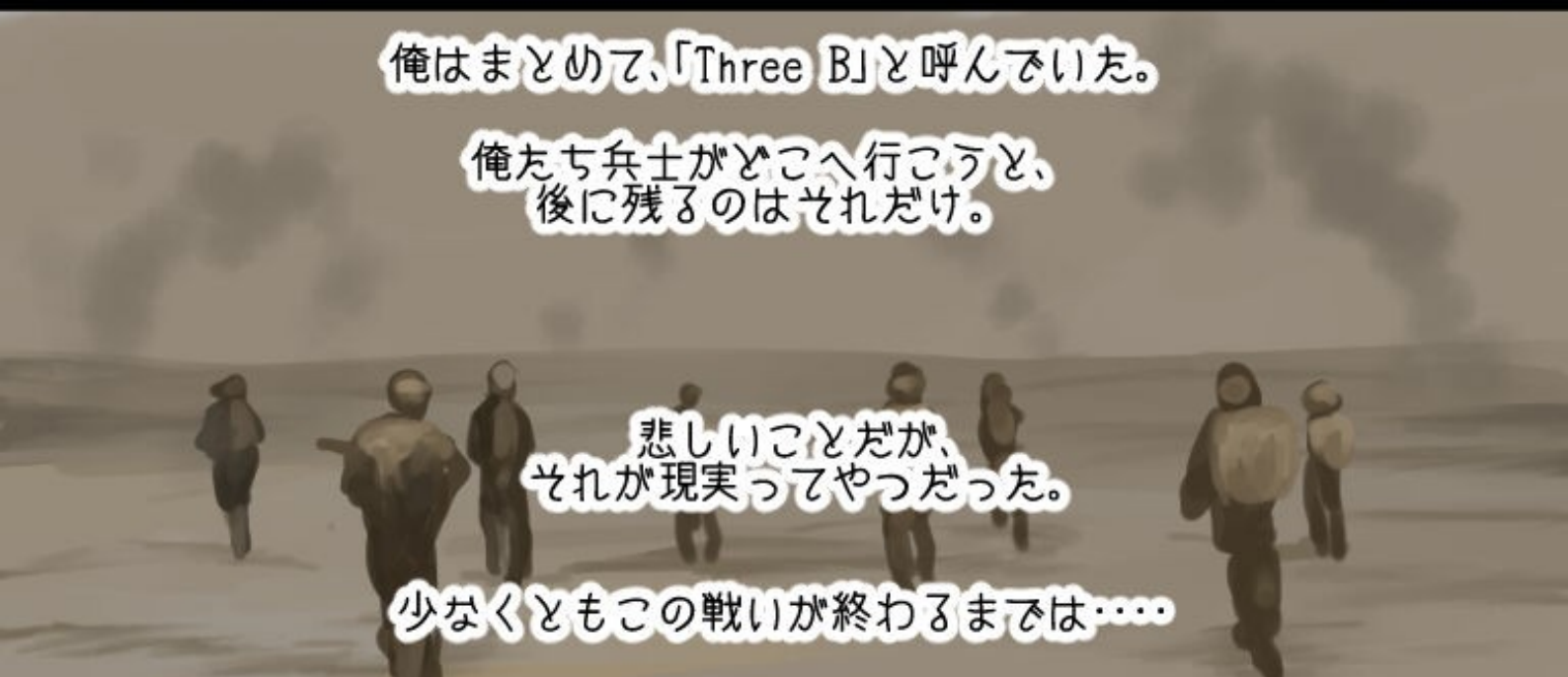
BLOOD  
(血)



BULLETS  
(弾丸)



BODIES  
(死体)



俺はまとめて、「Three B」と呼んでいた。

俺たち兵士がどこへ行こうと、  
後に残るのはそれだけ。

悲しいことだが、  
それが現実ってやつだった。

少なくともこの戦いが終わるまでは……

ともかく、そんな生活だったので、楽しみなんてものはほとんどないも同然だった。



朝起きて、飯を食ってはひかけていき、どこかで何かを撃つだけの毎日……



いかれた日常だ。そんな日々をどうやって乗り越えていたのか、たまに不思議に思うほどだ。



でも、俺が  
なんとか  
やってこれた  
理由に



たったひとつ  
心当たりがある  
とすれば……

それはコールの存在だった。

俺の名はモンド。

そこに配属された  
時の俺はまだ  
ペーペーの新人で、



自分が放り込まれた  
ところがどんなところが  
まったくわかって  
いなかった。

一番のチビで、いつも  
隊のおちこぼれだったの  
で、よく仲間たちからいじめ  
や嫌がらせを受けていた。



一方、黒豹のコールは、隊の中でも  
間違いなく最強レベルの戦闘能力の  
持ち主だったから、ヤツにちょっか  
いをだそうなんてやつはひとりも  
いなかった。



まさに男の中の男、  
兵士の中の  
兵士といった  
存在だった。

そんな  
対照的な  
俺たち  
だったが...







出会った瞬間から、コールは俺を友人として扱ってくれた。



そして、今日に至るまで、コールは俺にとっても唯一無二の親友でありつづけている。

俺は友人としてコールと一緒にいたわけだが、



ただそれだけで、俺もみんなから一目おかれるようになった。



俺のことを  
認めてくれるやつらも  
いる一方で、



コールの存在のために、  
俺に直接手を出してくるような  
やつは誰もいなかった。



あからすまに  
毛嫌いするやつもいたが、



しかし、  
オレは間違っても  
コールの威光を  
笠に着て、ぬくぬく  
過ごしていたわけ  
ではない。

俺も自分なりに努力して、徐々に実力をつけて  
いったし、その結果として、コールと力の上でも  
対等な仲間になることができたと自負している。



確かなのは、俺は決してコールに  
面倒をかけなかったし、結局は  
兵士としても申し分ない実力を  
手に入れたということだ。



自分で言うのもなんだが、  
トップクラスの兵士の  
一人になれたと思っている。

その一方…

俺にとってコールは  
親友以上の存在に  
なりつつあった…



俺たち兵士は、戦場においては常に孤独になりがちだが、  
俺にとって唯一の楽しみは、コールと過ごすひと時だった。



そうするうちに、俺はコールに特別な感情を抱くようになってしまったのだ…

最初は俺も男を好きになるなんて  
どうかしてると思ったが、  
それにもすぐに慣れてしまった。



それに俺はこれまで  
女と付き合ってたまくいった  
ためしなかったの、  
かえってそれもつじつまがあう  
ようにも思えてきた。

かと言って、とてもコールに  
自分の気持ちを打ち明ける  
ような勇気はなかった。



今の関係を失ってしまう  
のが怖かったのだ。

しかし、コールへの思いは  
日に日に募っていくばかり…

俺の関心は、当然のごとく  
あっちの方にも及んでいった…





なんというか…  
コールは本当に  
男らしく…  
その男くまさにオレは  
興奮を覚えるように  
なってしまったのだ。

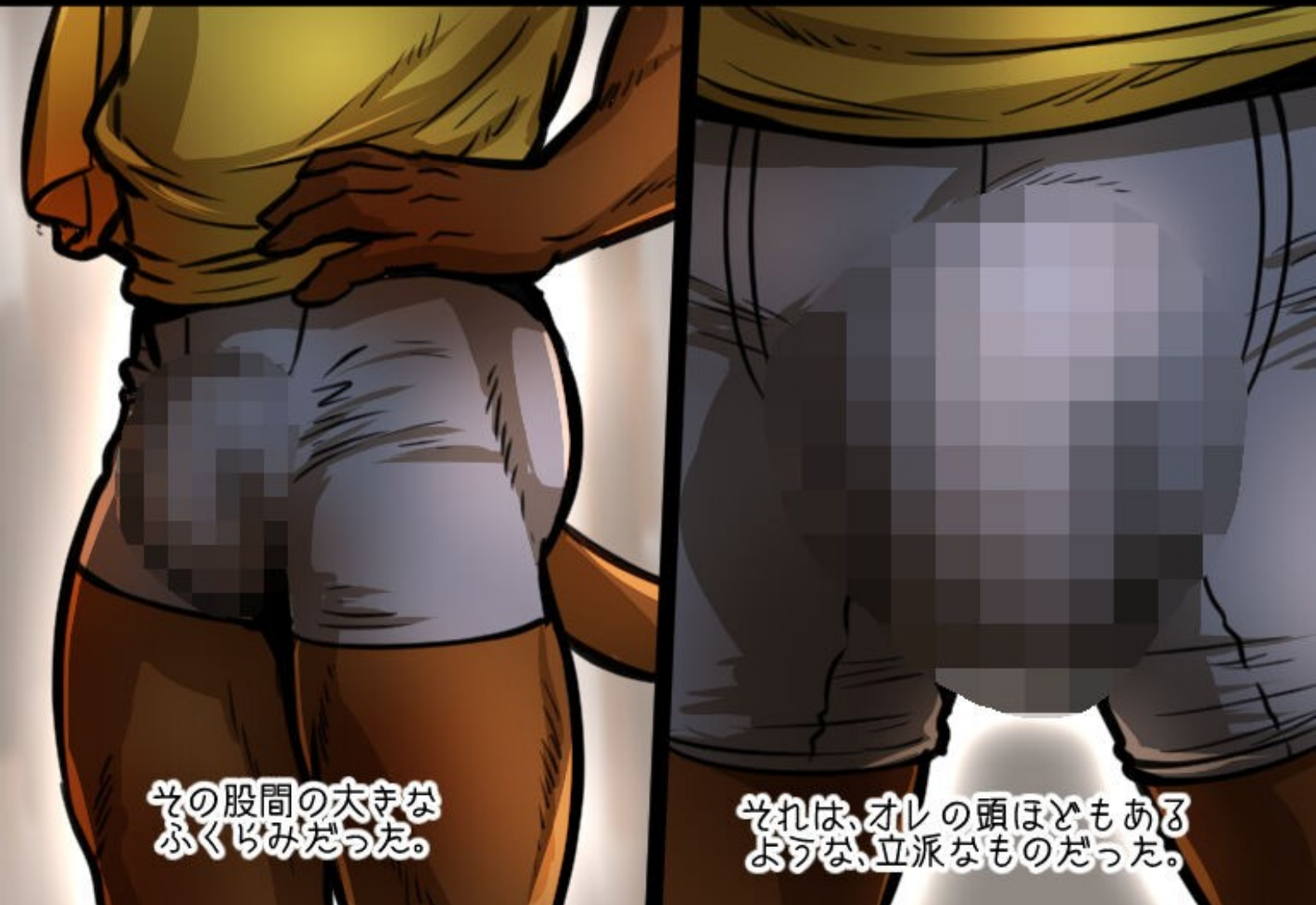
背が高く、その身体は鍛え上げられ、  
筋骨隆々としていた。



コールがそばを歩くたびに  
オレはそのゆさゆさと揺れる  
たくましいケツから  
目が離せなくなってしまう…



けど一番オレが  
気になったのは  
やっぱり...



その股間の大きな  
ふくらみだった。

それは、オレの頭ほどもある  
ような、立派なものだった。

そいつが硬くなったら、  
一体どれほどの大きさに  
なるのだろうか。。。。

...



その頃の俺は  
頭の中でそんなこと  
ばかり考えていた。



そう、  
その運命的な日が  
やって来るまでは。。。

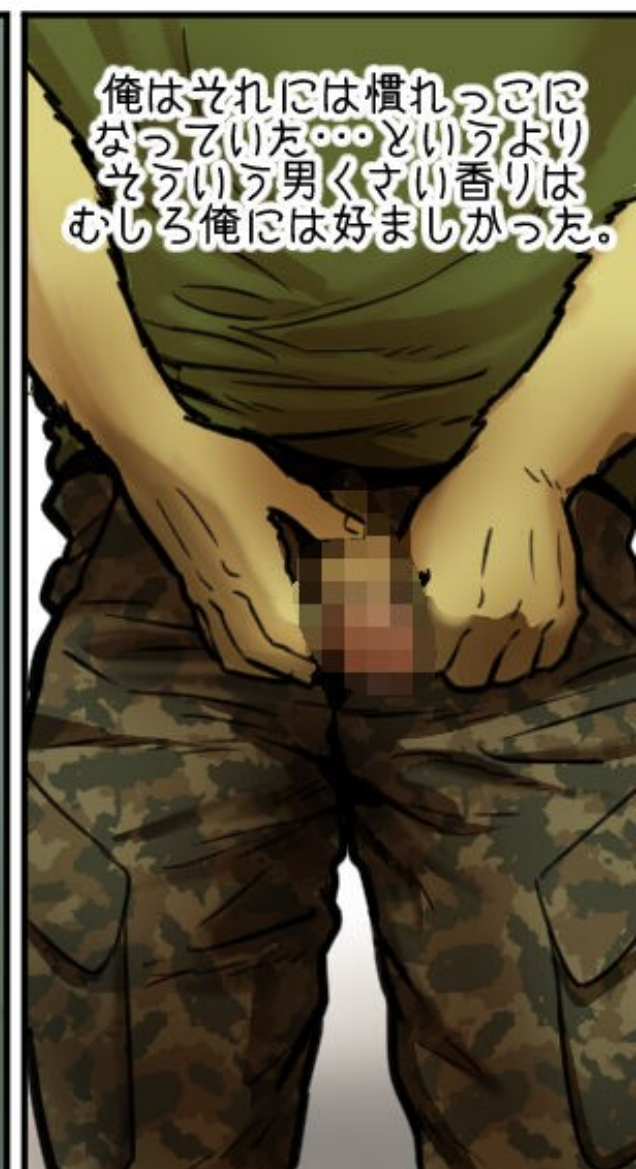


その日、夜も更けてみんな  
すっかり寝床に入った頃、  
俺は用を足そうと、ひとり  
トイレに向かっていた。



シャワーも併設されたトイレ  
エリアはもちろん共用で、  
当然プライバシー  
なんてないも同然だった。

それに使うのは野郎どもばかり  
なわけで、自然とにおいも  
それなりものになっていた。



俺はそれには慣れっこに  
なっていた。。。というより  
そういう男くさい香りは  
むしろ俺には好ましかった。





俺は内心バニクってしまった。

コールは俺の真横の便器の  
前に来て、シッパを下ろした。

THUMP THUMP

その音を聞いて、俺はもう  
心臓がとまりそうになった。

というのは…

もしコールのイチモツを見てしまったら、俺は自分のモノを抑えられなくなるとわかっていたからだ。



俺に腹を立てるのが…  
あるいは俺のことを  
マニアや変態だと  
思ってしまうのだから…

俺はコールに嫌われることを最も恐れていた。それはつまり俺が唯一の親友を失うということだったからだ。



そんなことになったら、俺はまた最初のように誰も頼ることのできない孤独な狼に戻ってしまうのは明らかだった。

一緒に並んで男同士  
用を足しているよ…



それだけで俺は自分が  
むらむらしてくるのが  
わかった。





で、その時俺は…



つい見てしまったのだ…

ずっと夢にまでみていた  
そいつも…



コールのモノは  
勃ってもいないのに  
すごく長くて太かった…



まさにコールの目の前で  
俺のモノはガチガチになって  
しまったのだった。



十分すぎる光景だった。

そいつは残った液体を  
吐き出しながらも、俺の  
真ん前でおっ立っていた。

俺の体はじっとり汗ばみ、  
自分自身が興奮していくのを  
抑えきれなくなっていた。

俺はどうしていいかわからず、  
用が終わるまでそこに  
突っ立っているしかなかった。

コールの方からわずかに  
びっくりしたような  
声でしたので、  
彼にそれを見られて  
しまったことがわかった。

俺はもうコールに  
嫌われたに違いない  
と思った。

ほかのみんなと同じように、  
コールも俺を遠ざけ、ひどい扱いを  
するようになるのだろうと……

……その時、思いもよらない  
ことが起きたのだ……



そこには俺たち二人の  
ぞぞり立つモノがあった。

コールもまた自分のモノを  
固くマせていたのだった。



最初俺は夢でも  
見ているのかと思った。


HEY,  
MONDO

するとコールが話しかけてきたのだ。


今日の仕事もおわったことだし、  
一緒にシャワーでも浴びないか  
とコールは誘ってきた。

まるでオレたちの今の状況を見  
無視しているかのような話しぶり  
で、俺にはコールの意図がよくつか  
めなかった。


用を足し終わると、コールは  
屹立したそれを隠しもせず  
シャワーの方に向かって行った  
ので、俺もそれに従った。



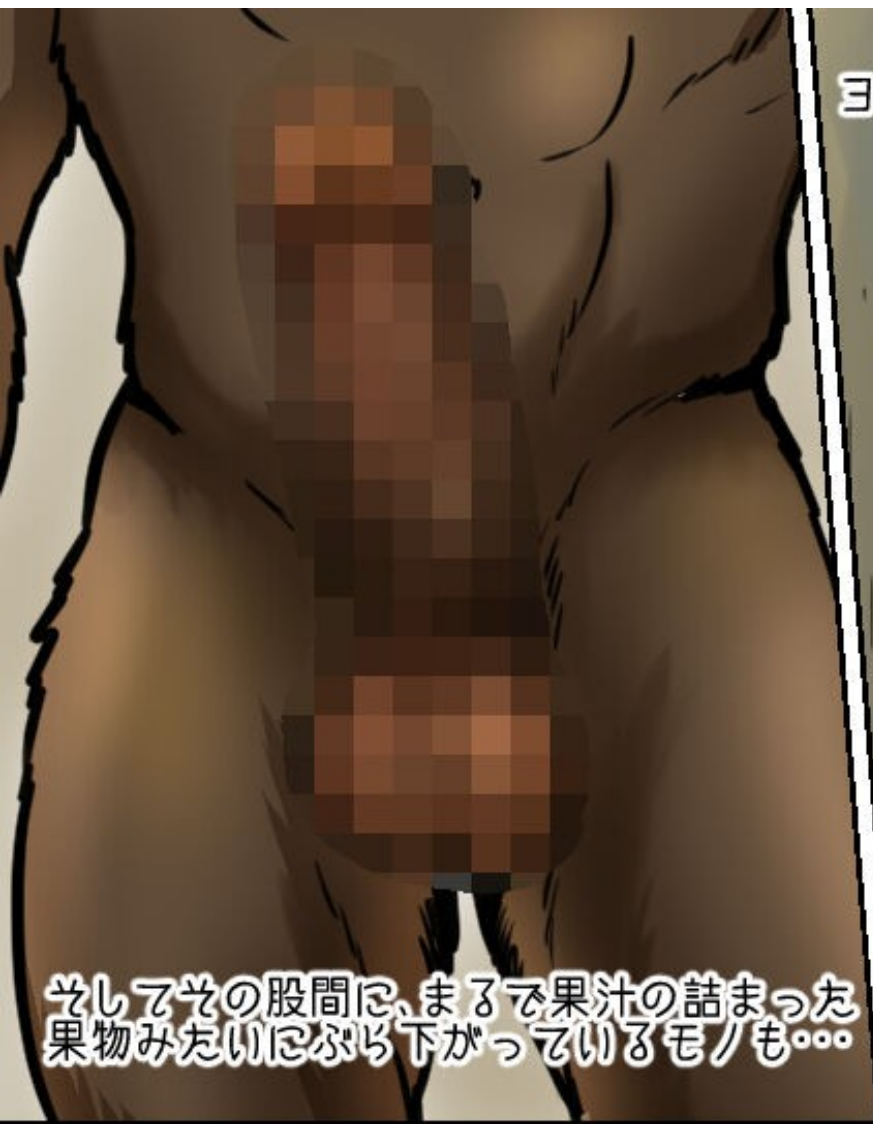
コールが制服やブーツを  
脱ぎ捨てると、彼の  
裸体があらわになった。



俺はもうただただ  
圧倒され、その肉体に  
みとれていた。



たくましい筋肉、  
分厚い胸板、大きな尻……

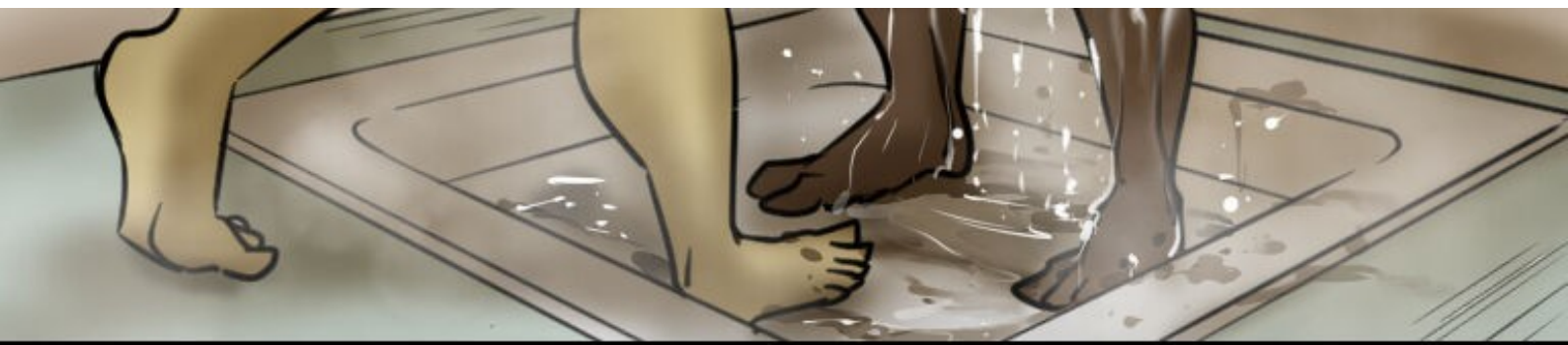


そしてその股間に、まるで果汁の詰まった果物みたいにぶら下がっているモノも...

俺はそれを味わってみたくて、ヨダレがあふれ出すんばかりだった。



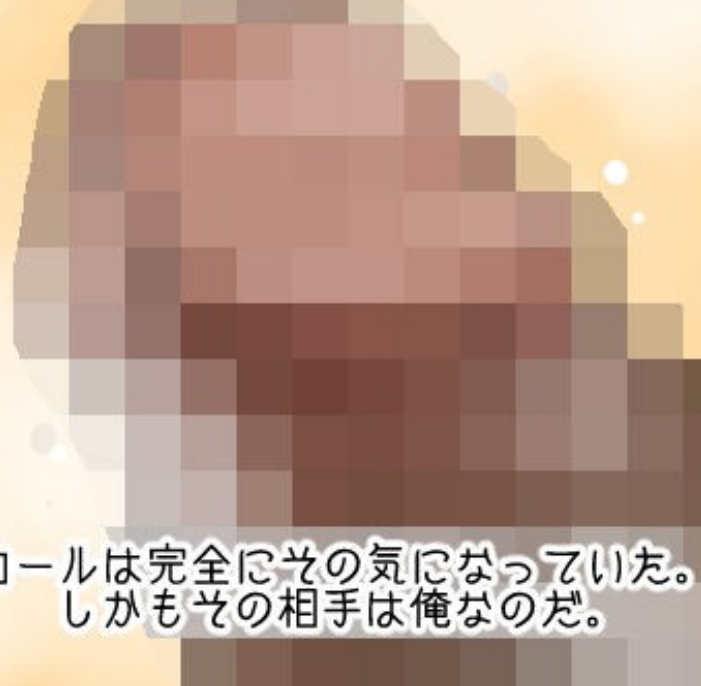
俺が服を脱いでいる間に、コールがシャワーの蛇口をひねった。あたりには蒸気と熱気が漂い始めた。



シャワー室の中で、俺たちの体毛は濡れて湿気を帯び、ライトの光を反射して光っていた。



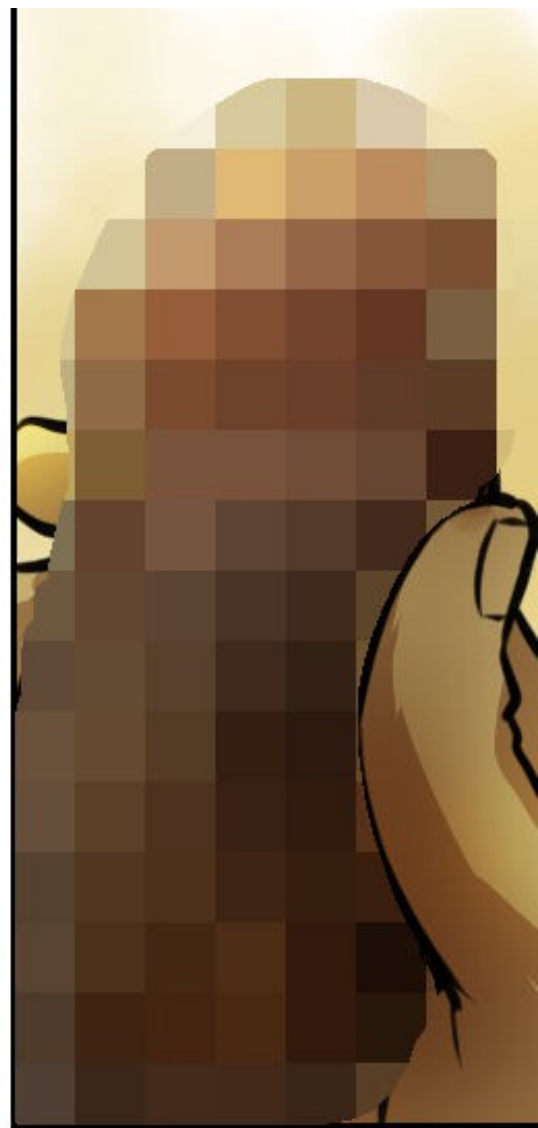
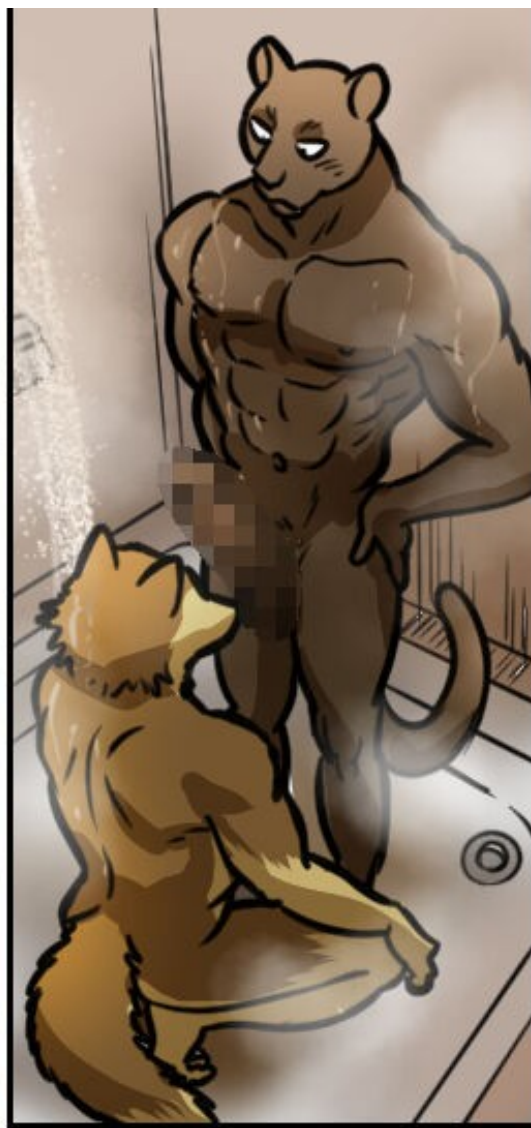
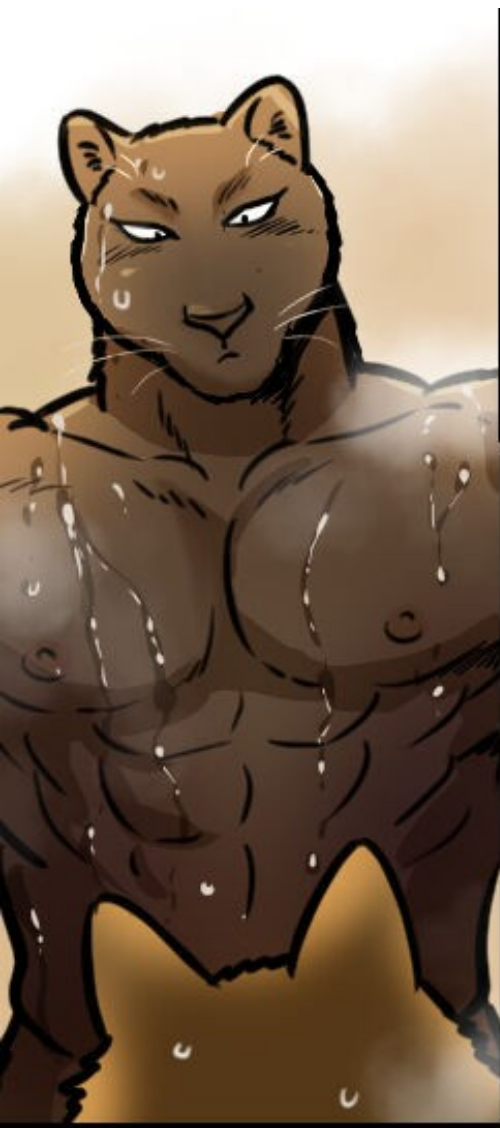
コールのモノから先走りが出始めているのが見えた。



コールほどではないが、俺もそれなりに体は鍛え上げていた。

俺は、精一杯頑張った末、なんとか手に入れた自分の筋肉を披露した。

コールは完全にその気になっていた。しかもその相手は俺なのだ。



俺はササリ立った  
コール自身を味わった。





サオを唇でくわえながら、  
すみずみまで舐め上げ…

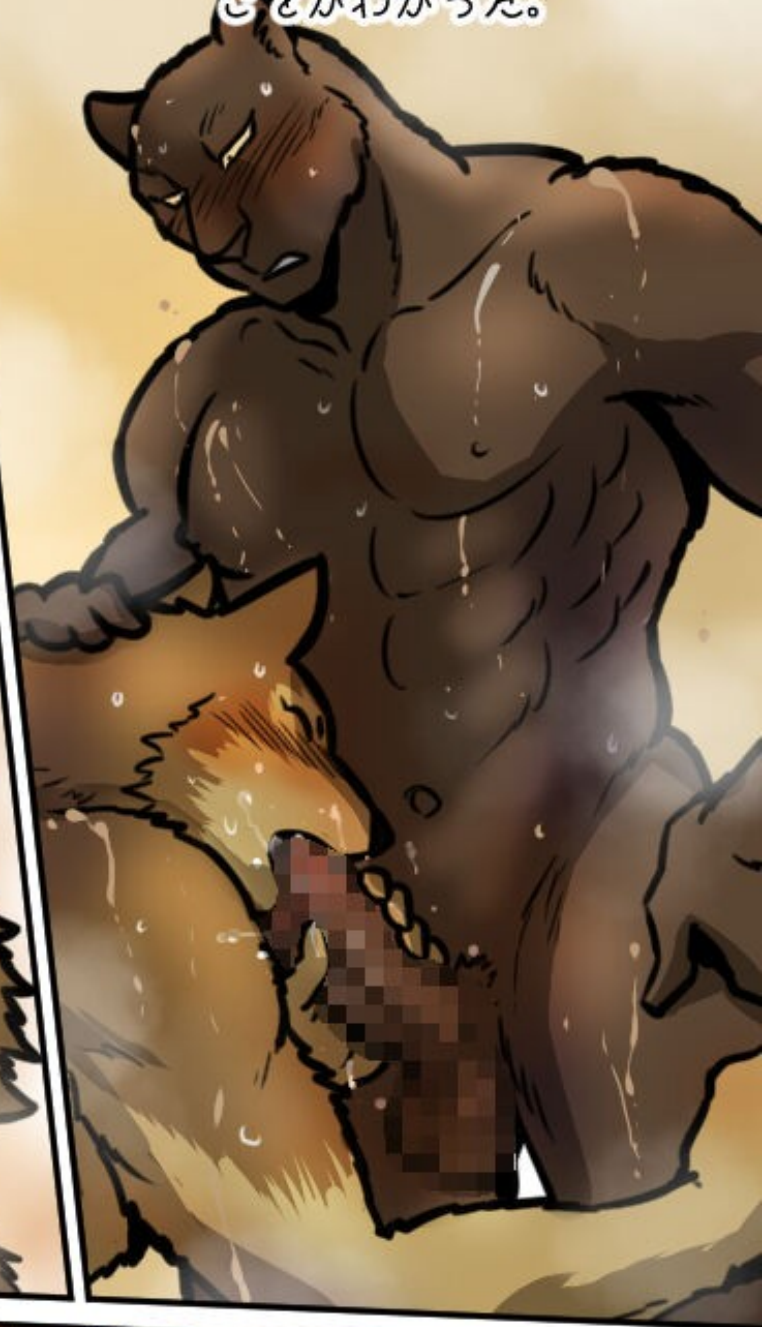


舌を絡めてタマを  
しゃぶり尽くした。



動きを早くすると、  
よりいっせう回の中に  
先走りが溢れてきた。

深くくわえ込んで頭を動かすと、  
コールの息遣いが聞こえて、  
俺は自分が上手くやれている  
ことがわかった。



コールのモノが脈打ったたびに  
吹き出す塩味のするそれを、  
俺は余すところなく味わった。

そして、その瞬間がきたのがわかった。

コールが吐き出した精が、  
喉を通り過ぎていくのを感じた。

それはすごく温かく濃厚で、  
俺は思わずむせ返ってしまったほどだった。

コールはそうとうためていたの  
だろう。マスをかく暇もほとんど  
なかったんだろうと思う。

コールの事が済むと、俺は立ち上がった。それまでに起こったことに無我夢中で、立つのがやっとの状態だった。



まるで夢の中にいるようだった。もし夢なら俺は絶対目覚めたくはなかった。



コールはさらにその先を続けるつもりだったのだ。



呆然とする俺を、コールは抱きしめ、抱え上げた。



何が起きているか俺が  
ようやく気づいたとき、  
コールは俺の背中を  
壁に押し付け、  
自分の力だけで  
俺を持ち上げて  
いるところだった。

コールはこちりを  
一瞬見たかと思うと、  
すぐに頭を低くした。

コールは俺の足を  
高く持ち上げ、  
ケツがよく見える  
ようにしたのだ。

AH...

その舌先がそこに触れるの  
を感じて、俺は思わず声を上げた。

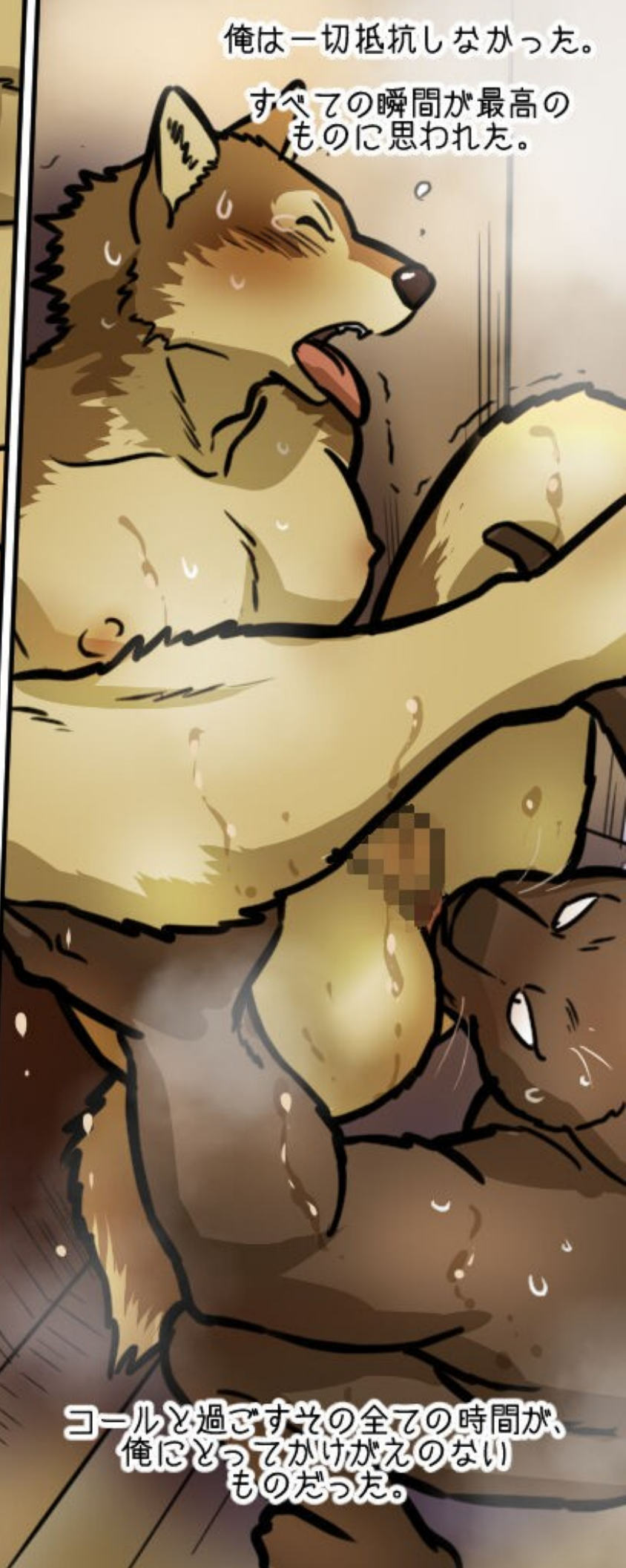
コールは入念に  
下準備を始めた。



コールの舌に入り込まれ、  
俺のその部分は湿って滑りか  
なっていた。

俺は一切抵抗しなかった。

すべての瞬間が最高の  
ものに思われた。



コールと過ごすその全ての時間が、  
俺にとってかけがえのない  
ものだった。



コールは俺を抱き寄せ、俺の足をコールの腰にからめさせた。



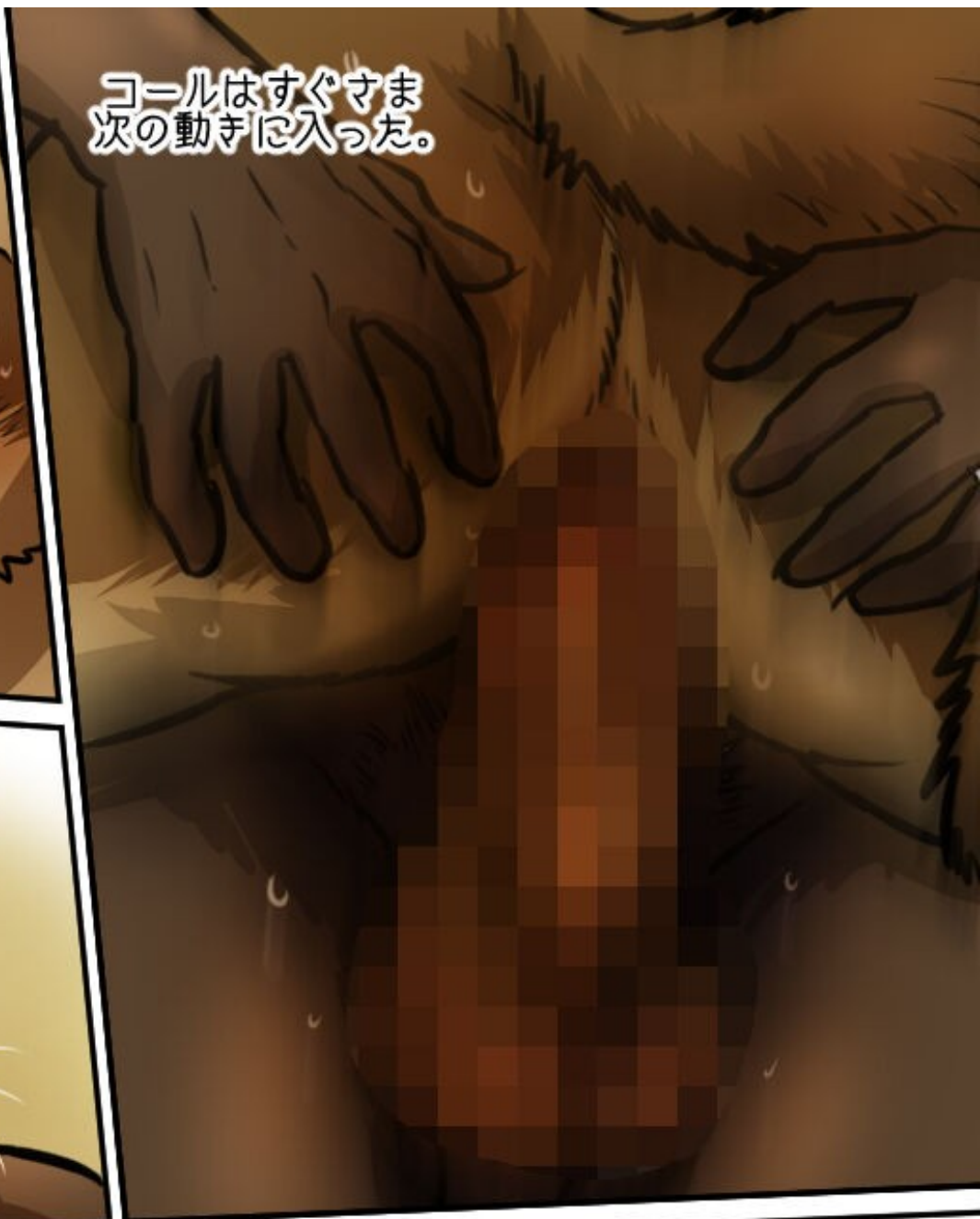
コールのいきり立ったそれが自分のケツ穴に突き立てられているのを感じた。



俺はコールの目を見つめた。

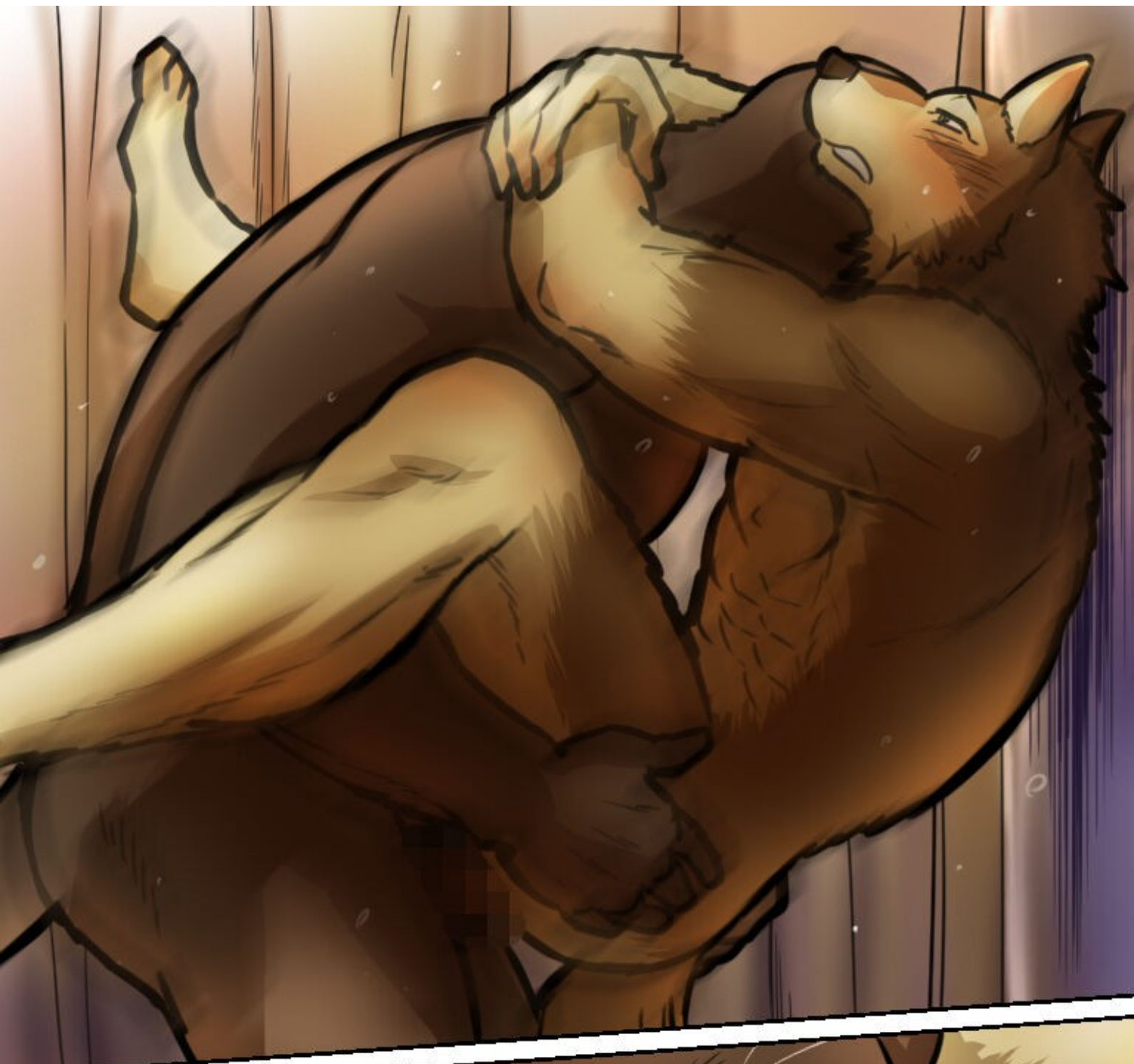
そして、無言で  
それに応じた。


コールはすぐさま  
次の動きに入った。



**NGH!!**

コールのモノが俺のケツを  
激しく突き上げるのを感じた。  
その肉棒によって腹の中が  
引き裂かれているようだった。






俺は自分が壊れて  
しまうんじゃないかと  
思ったが、コールの  
ためになんとか  
もちこたえた。

コールのモノが  
何度となく俺を貫いた。

俺は痛みとともに、  
コールが望むことをさせて  
あげられているという  
喜びもまた感じていた。

何よりもまずコールを  
悦ばせたかった。




コールの熱いものが  
俺の中に注がれ、  
俺たちは声を上げた。

コールの動きが激しくなり、  
絶頂を迎えようとしているのが  
わかって、俺は身構えた。



AAAAAH!



二人ともおのれの欲求  
の前に為すすべもなく、  
ただただ悦びに浸っていた。

その時点で、俺たちはどちらも  
事の最中に誰かが聞き耳を  
たてているかもしれないなんて  
気にもしていなかった。



俺にとって何より重要なのは  
俺のヒーローと過ごす、  
今この瞬間だけだったのだ。

その後二人で体を流して、  
俺は全て終わったものだと  
思っていた。



だがその時、コールは少し  
笑いながら、俺の方はまだ  
出してないんじゃないかと  
聞いてきたのだ。

コールが  
ありったけの  
精液を俺の中で  
吐き出して  
くれたのを  
感じて、俺は  
幸福感で吐息を  
漏らした...



確かにその通りだった。  
俺は自分のことより  
コールが気持ちよくなること  
ばかりに集中していたからだ。

その時突然...



コールは腰を曲げて、  
その大きなケツを  
俺に向けてきたのだ。

それはまるで  
巨大なメロン  
みたいに豊かな  
丸みを帯びていた。



俺はすぐにでもその  
中にぶち込んでみたい  
衝動にかられた。

だがコールがまた笑った。  
俺は一瞬コールが  
からかっているのかと思った。

でもその後すぐに、コールは  
さっき自分がやったように  
やれと俺に言ったのだ。



コールが俺に舌を突き出して  
見せてくれたので...

俺はようやく全てを理解した。

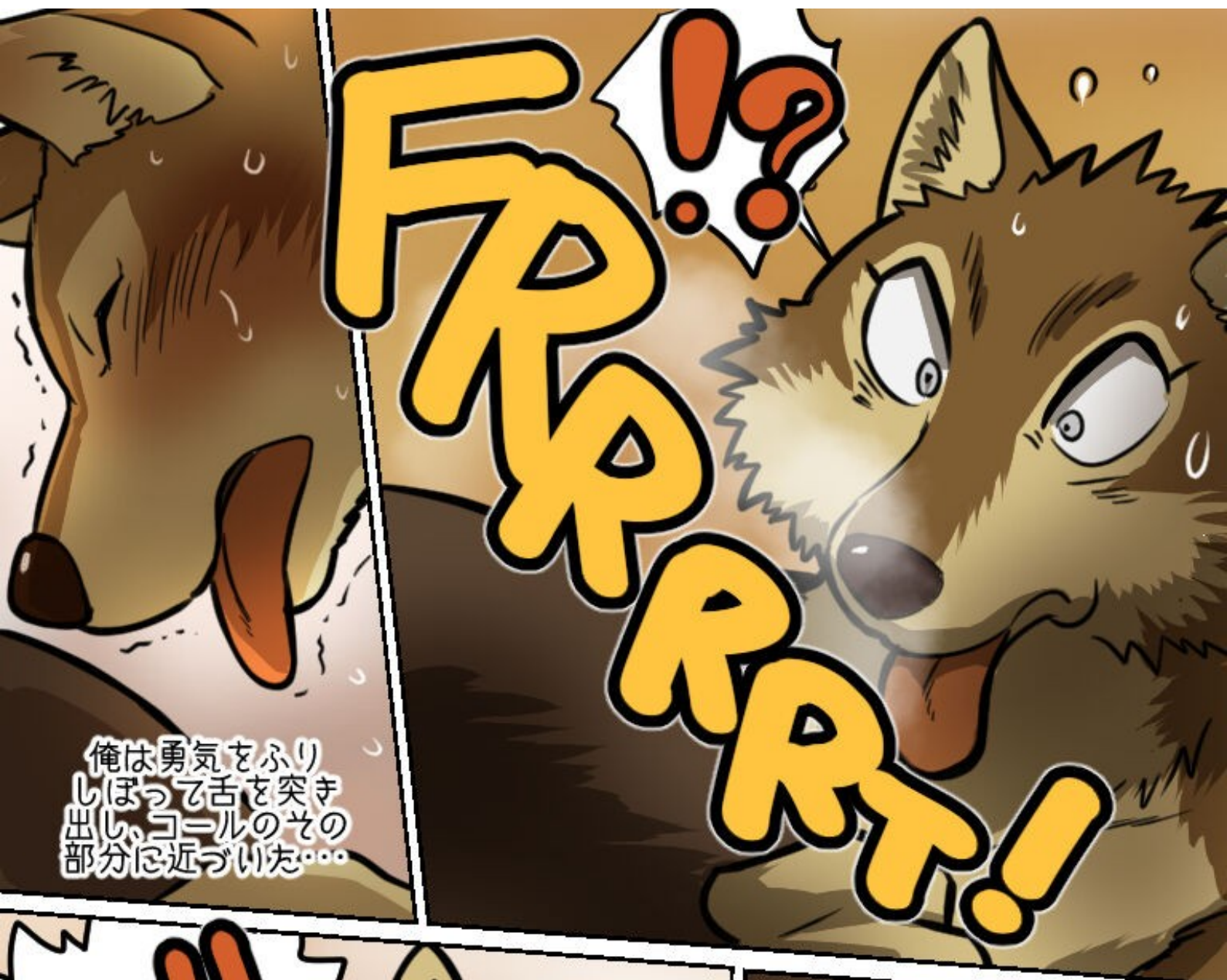
俺は屈んでコールの  
ケツをつかんだ。

緊張した。それに、  
さすがにこんなことは  
これまでしたこと  
なかったので、やはり  
躊躇してしまったのだ。

いまだ興奮状態に  
あったものの、  
いざ他の男のケツを  
舐めるとなる...

普通の人が思うのと同様、  
正直俺にも無理だと思った。

けどコールがささまでして  
くれてるのに、その言葉に  
従わないなんて俺には  
もっと無理な話だった。



俺は勇気をふりしぼって舌を突き出し、ゴールのその部分に近づいた...





HA HA  
HA HA

俺はまんまと  
コールのやつに  
してやられたのだった。

鼻を押さえつけて後ずさると、  
コールは腹の底から  
笑っていた。

しょっちゃんではないが、  
コールはたまにこんな  
いたずらをしかけてくる  
ことがあった。俺にとって  
コールのそんなところも  
魅力の一つだった。



コールの笑い声は  
ほんとに大きくて、  
どこにいても  
せこらじやうに響く  
ほどだった。

HA HA HA  
HA HA HA  
HA HA HA!!!

コールが笑うのを見ると、  
俺もいつも自然に  
笑ってしまう...



HA HA HA  
HA HA HA  
HA...

ぞうのたとえこんなことを  
されても俺はもう  
一緒に笑うしかないのだった。

You got me...

ひとしきり笑うと、  
コールは次の動き  
に入った。

指をくわえて、  
つばで湿らせると...

なんと俺の目の前で  
その指を自分のケツ穴に  
ぐいぐい突っ込んだのだ。

UGH..

NGH  
...

そうやって  
俺を受け入れる  
準備をしながら、  
コールは顔を  
紅潮させ、うめき声  
をもらしていた。

コールのそんな姿  
を目の前にして、  
射精するのを我慢  
できたなんて、全くの  
奇跡だったと思う。

それが終わって  
指を引き抜くと、  
コールはケツを  
俺の方に持ち上げ  
体勢を整えた。




俺はコールのケツに  
つかまり、ナニを  
ケツっぺたてはさんで  
ひと呼吸おいた。



行為に及ぶに当たり、  
俺は深呼吸して、  
コールの体から  
伝わってくる温かさを  
感じた。

コールのおかげで俺がどれほど  
の男になれたのかを示すのは、  
今この時しかないと思った。




俺は力の限り  
コールを貫いた。



GVH...

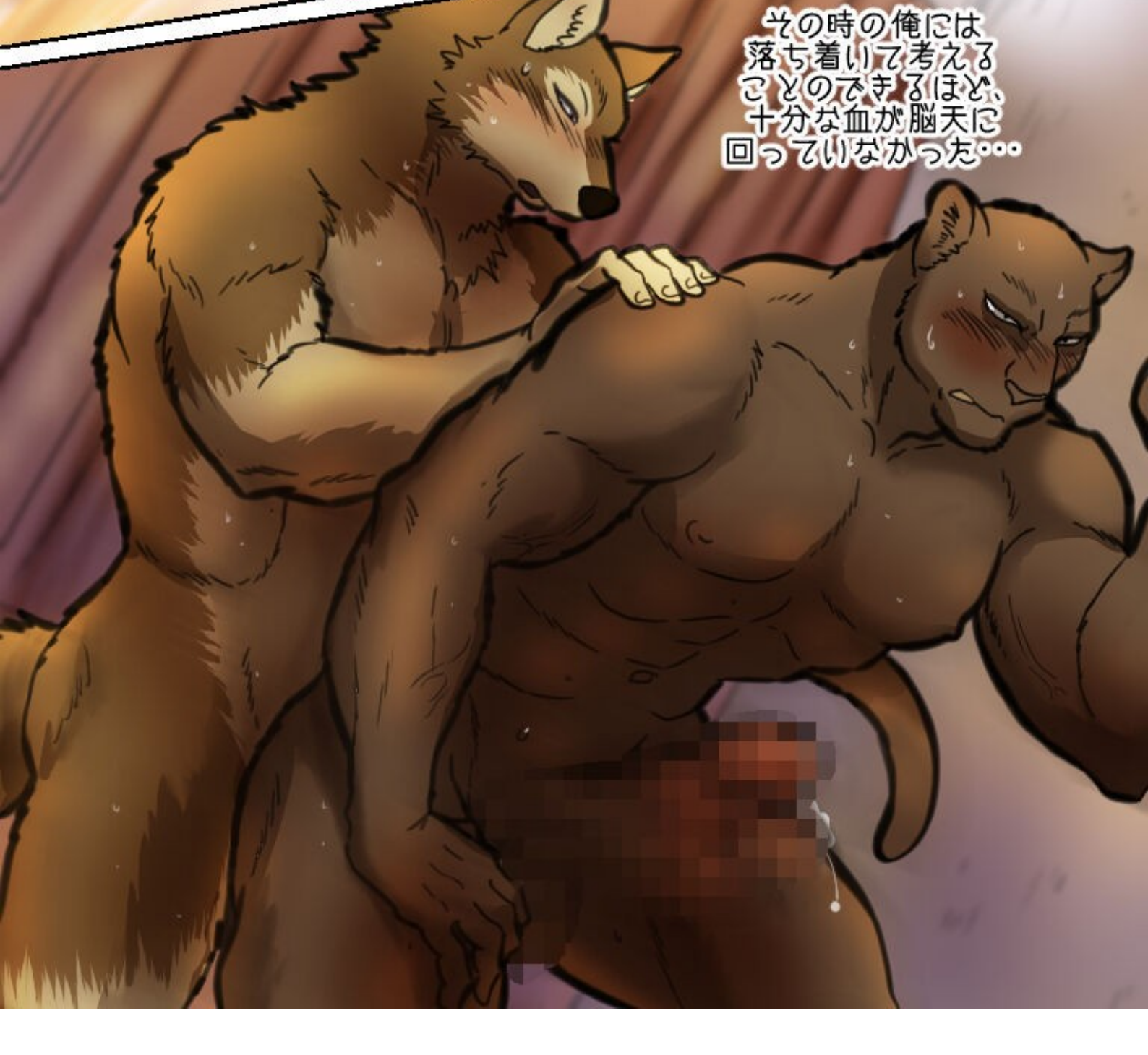
コールは一瞬  
痛みでびくりとした。

コールに 대해서도,  
こんなことは初めての  
体験だったようだ。



コールがどうして俺にこんなことを  
させる気になったのだろうと思ったが、  
それはあとで尋ねることにした。

俺はもう夢中で、  
自分をおさえきれなく  
なっていたからだ。



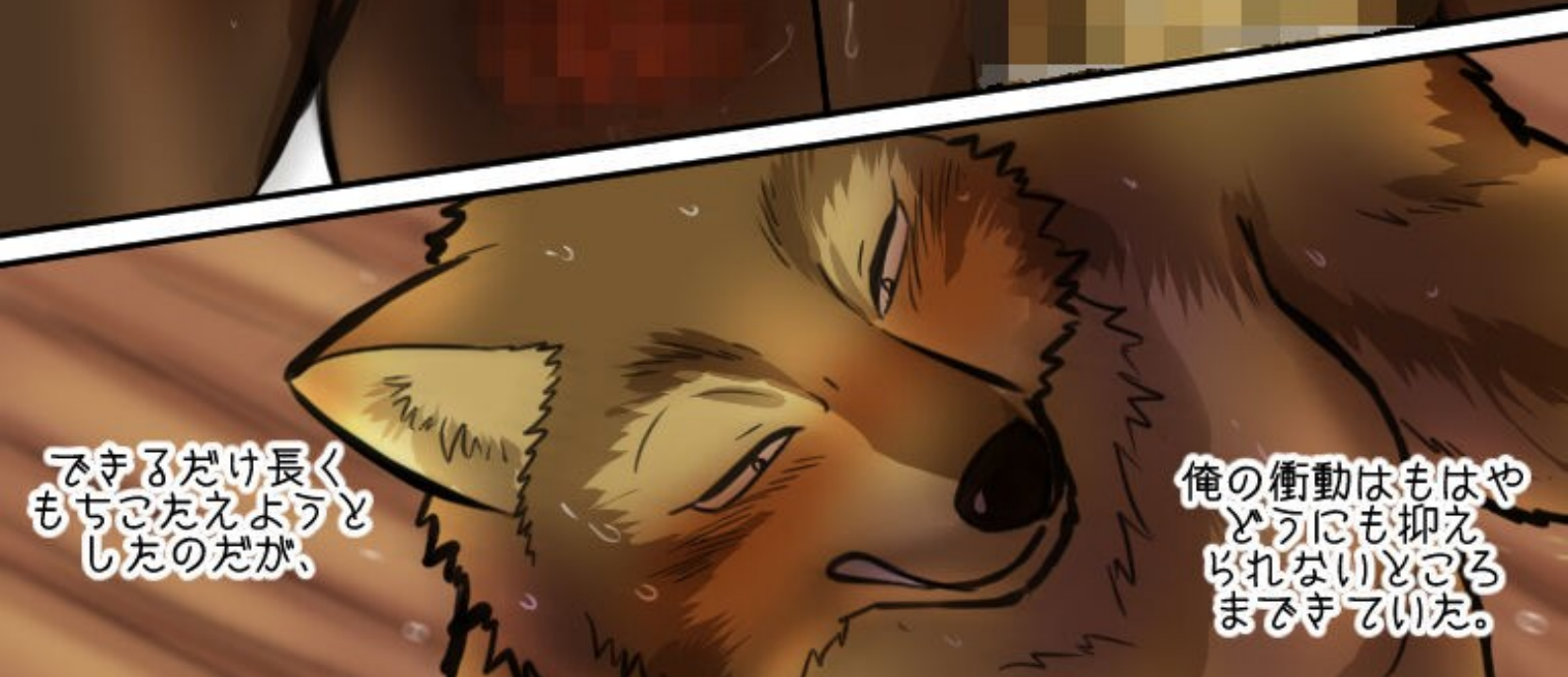
その時の俺には  
落ち着いて考える  
ことのできるほど、  
十分な血が脳天に  
回っていなかった...



先走りを  
ほとぼしらせながら、  
俺はさらにすばやく  
ゴールに腰を打ちつけた。



もう限界に  
近づいていた。




できるだけ長く  
もちこたえようと  
したのだが、

俺の衝動はもはや  
どうにも抑え  
られないところ  
までできていた。

俺は大きな声をあげながら、  
ヨールの尻に激しくひと突きし、  
人生において初めてっくらしい  
大量の精液をぶちまけた。

その瞬間、この大きくて  
頑強な黒豹が、悦びの  
中で悶えている姿が  
俺の目に映った。



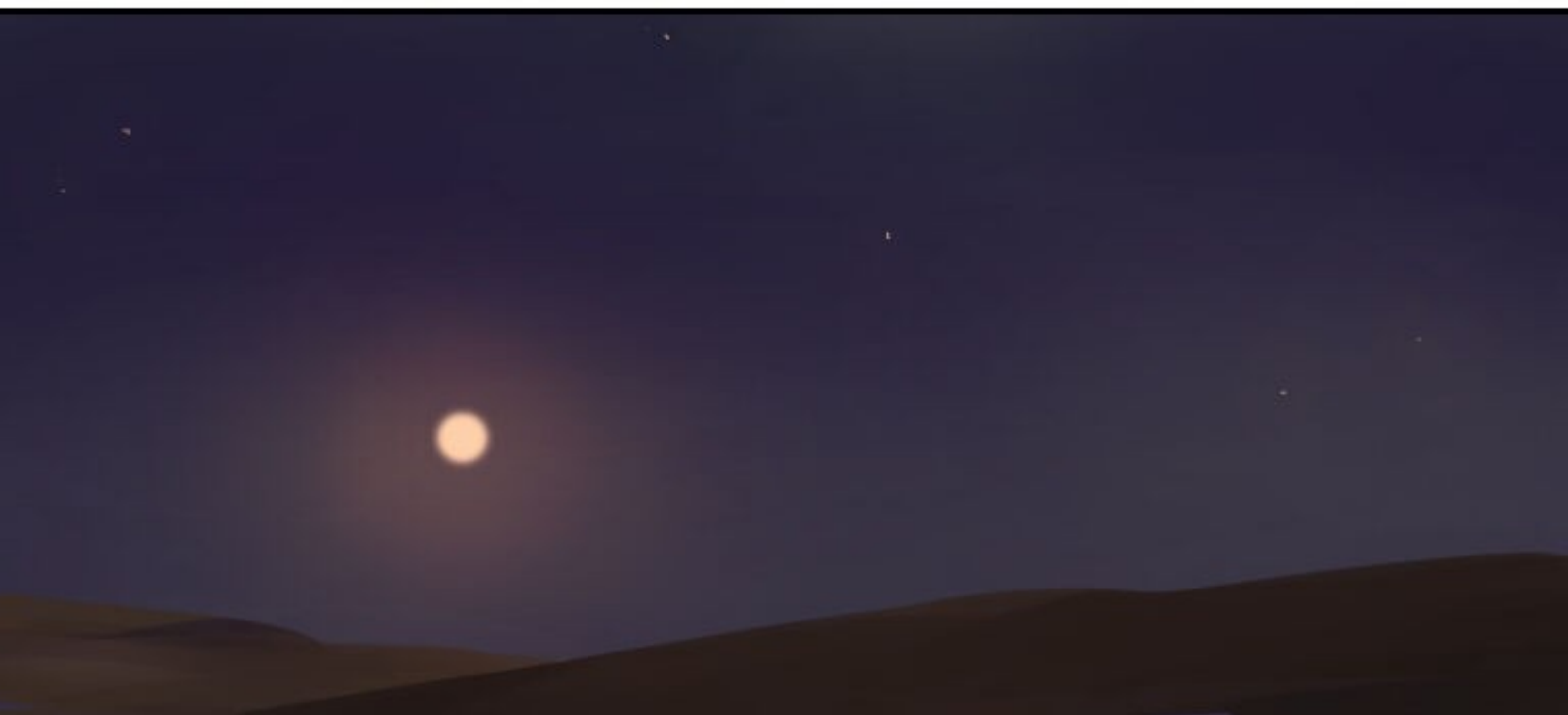


コールは俺の精液が  
自分の中で放たれることを  
望んでいてくれた……



コールの反応が俺と同じ  
だったので、俺は  
そう直感したのだった。

俺がコールを求めるように  
コールも俺を求めてくれていたのだ……



シャワーを出た俺たちは服を来て、  
寝床に戻ろうとしていた。



でもその時コールの目が妙に  
悲しげに見えたのだ。



俺はそれが気になって、何か心配事  
でもあるのかとコールに尋ねた。



俺と今夜こんな関係に  
なったのは幸せなことだし、  
最高に楽しいひと時だった、  
とコールは話した。

一方で、コールはあることを  
恐れているというのだ。



最初俺はコールみたいなのやっが  
何かをこわがること  
があるなんて信じられなかった。

ひと呼吸おくと、  
コールは言った…



その一方で、俺は自分の思いやえにコールを失ってしまうのではないかと、恐れていたというわけだ。

俺がコールの目を見て、その恐れに気づいたことは、コールにもわかっていた。

心の奥底で、コールもまた俺と同様に、この世界を恐れていた。

この孤独だった狼と同様に、この強靱な黒豹もまた、自分が置かれた状況がどういふものか、ほとんど把握できずにいたのだった。

それがどういふものであるに  
しろ、コールに分かっていた  
のは、自分には俺という存在が  
必要だということだけだった。



それは…  
コールにとっても俺が  
親友と呼べる唯一の  
存在だったからだ。

俺はコールにそれ以上  
なにも言わせなかった。

俺もまた、もう言葉を  
必要としなかった。





たとえ  
どんな時でも

俺たちは常に  
お互いのそばに  
いるだろう。

俺が強くなった理由、  
強く有り続けている  
理由はここにある。



言葉なんてなくても、  
ヨールには俺の思いが  
伝わっていたと思う。

そう、全ては  
ヨールのためだ。

THE END